

レースっていいよね
第53回 「ありがとう。そして、さようなら」 の巻

ここ数ヶ月間、好きになったヒトがいた。
「いた」・・・という文字通り、それはもう自分の中で過去の記憶となった。

こんなプライベートな内容を赤裸々に記すのはどうか、とも思ったけれど
思いの丈を文章に直すことで、自分の気持ちを整理できるし、いつかこのページ
を自分自身で読み返した時、「そんなこともあったな」と、懐かしみたいと考えた。
だから、切なくて、やりきれない今の状態から本当に立ち直った時、このページは
もしかすると消去するかもしれない。とにかく、自分の中でじっくりと整理したいのだ。

個人を特定されないためにも、余り詳細は書けないのだが、相手の女性は私にとって
とても刺激の多いヒトだった。

過去のデータをかえりみると、どうやら私は元来、キャラの濃い女性を好きになっているようだ。
ある意味、これも一種のフェチズムなのだろうか？ とにかく、その彼女はそこら辺の男共よりも
「男っ前」なキャラクターであった。

その類稀なるキャラを持つ彼女に惹かれるには対して時間は掛からなかった。
話せば話すほど、会えば会うほど。想いは加速度を増したのである。
もっとも、彼女の場合「男っ前」より以前に「男クサイ」という一面を感じずに
いられなかったのだが・・・。

彼女には熱中している趣味がある。傍目から見れば、そのいれ込みようは異常にも映る。
引き換え、私には実は趣味らしい趣味が無い。
いや、正確には、「テニス」や「サーフィン」のような、単一名称で名の通った、市民権を得ている
趣味が無いのである。

しいていうなら、「たまに料理作ると食べるのが好き」「神社や寺の境内を散歩するのが好き」
何より、「運転するのが好き」・・・しかし、これはきっとよく使われる「ドライブ」という単語には該当
しないと思う。ずいぶん過酷なサバイバルチックな走行が多いから、「ドライブ」というカワイイ響きの
言葉から少し逸脱している、と思うのだ。

そして一番好きなのは「レース屋でいること」なのである。
勿論、レースそのものも好きなのだけど、これには付随するヒト、モノ、文化、旅、音楽
という要素を包括的に含んでいるから、だから私にとって仕事が趣味で、趣味が仕事なのである。

つまり、生活の全てが「ON」の状態で、「OFF」になることが無い。
夢の中までレースの現場に居たり、水族館に行って水槽の分厚いアクリルの製造法について
熱く語ってしまうほどなのだから。

そんな私が彼女に会い、正直あせった。そして彼女は言った。
「私はちゃんと仕事以外のことで努力している」
こうも言った。
「常時 ON って、仕事と趣味が両立できないって、不器用なんだね」

仮にも、モノ作りの世界で生きている私に「不器用だと!？」
ムカついたけどそれ以上にショックだった。以前、親友の前田にも言われた。

「お前からレースを取ったら何が残るねん？」

何も残らない。何も無い。

レース屋でいることが、唯一の私の存在意義だったから。今まではそれで良いと思っていた。でも、人生を仕事以外でも楽しんでいる彼らを間近に見ると、恐ろしいほどの強迫観念を感じてしまったのである。

悩んでも、どうてい答えなど出てこない。そんなことを、友人 Y に話した。

すると、Y は あっけなく言った。

「何言ってるのよ、仮に AさんとBさんってヒトが居たら、AはBになれないし、BもAにはなれないのよ。生き方が違うんだから。どっちが上でも下でも無いのよ」

「それに、好きで仕方のないコトを見つけて、仕事にまでしてるんでしょ？
すごくシンプルでクイヤーじゃない！ 世の中のどれだけ多くが自分の好きなコトを探していることか！」

私自身、確かにそう思わないでもない。しかし、レース屋で居られなくなったら？
俺には何も残らないし……。

「じゃあ、ずっと続ければ良いのよ」

ああ、そうか。

この一言を聞いて、救われた気がした。そうだ。これが俺の生き方なんだった。

でも、あえて「私はちゃんと仕事以外のことで努力している」と言った彼女の言葉を甘んじて重く胸に刻みたい、とも思った。
確かに、そういった努力を今までしてこなかったのは事実だから。

とにかく、自分が今まで培ってこなかった「新しい価値観」を持つ彼女に、興味が尽きなかった。
でも、悲しいかな彼女は私を必要としていなかった。

今度こそ上手くいく、と信じたかった。

いや、本当は、心の何処かでは上手くいかないコトを知っていた。
意地になっていた面も無いではない。

ずっと、どう転がるのか読めない期間が長かった。おそらく、彼女の中では答えは既に出ているのだろう。でも、彼女を失いたくなかった私は、カッコ悪いほどなりふり構わずしがみ付いた。
その結果、本当に辛かった。得られないという結果を判っていながら、なのだから。
それでも失いたくなかったのだ。

かつて英国へアポイントも保証も無く働きに出た時、無宗教のクセに小さな教会で神に祈った。
「普通の幸せは要らない。かわりに仕事をさせて欲しい。」
その直後に宿に電話が入り、翌日から働くことになった。あの時ほど神の存在を身近に感じた事はない。

いま、おかげさまで仕事は順風満帆とは言わないが、順調と言える。

あの時の祈りは確かに天に通じていたのだろう。

ああ、神様。そこまで忠実に願いを叶えてくれるなんて……。

いまさら「普通の幸せも欲しい」なんて言ったら、都合が良過ぎるのは判ってる。

でもね、辛すぎるよ。こんなの。

精神的にもツライ時間が続き、しばらくはメンもロクに食えず、夜は闇が怖くて照明やテレビをつけっぱなしにしていた。まさに無間地獄だった。

一人の時間がこんなに切なく、苦しいなんて今まで思いもしなかった。お笑い番組を見ても瞬間的に笑うけど、スグに虚しくなる。一人だと何を食べてもマズイ。仕事をしていても集中力を欠き、ミスこそしないものの、落ち着かない。

ある日、彼女がひとこと言った。
「あなたの気持ちに何も答えられない」

それまでは何とかすがり付こうとしたが、闇を歩くのに疲れ果てた私には、これは最後通告となった。本心では諦めたくないと思いつつ、実はホッとしていた。果ての無い、いつ終わるとも分からない闇から突如開放された。

もう意地になるのはよそう。これまでよく頑張って戦った。もう充分だ。あのままでは何より自分自身が幸せになどなれないのだから。

それより、これほど他人を好きになれたことを、大切な思い出にしよう。出会いがあれば別れがある。この別れの辛さは、本当に好きだった証だと信じよう。

彼女と過ごした時間は決して長くはなかったけど、とても楽しかった。新しいことの連続だった。自分自身の弱さを知った。自分自身のことについて意外と何も知らない事実を知った。価値観の固まりつつある自分の愚かさに気付いた。

たくさんの思い出をありがとう。
そして、実ることのなかった私の思いよ、さようなら。

俺、頑張るよ。
支えてくれた前ちゃん、Yちゃん。ありがとう。

